

# 無料オンラインツールを使った海外で働く教師の連携 COLLABORATION OF TEACHERS WORKING IN ABROAD WITH FREE ONLINE TOOL

瀬尾匡輝, Masaki SEO, 香港理工大学  
村上吉文, Yoshifumi MURAKAMI, 国際交流基金カイロ日本文化センター  
佐藤慎司, Shinji SATO, プリンストン大学  
栗飯原志宣, Shinobu AIBARA, 香港大学專業進修学院  
青山玲二郎, Reijiro AOYAMA, 香港城市大学専上学院  
有森丈太郎, Jotaro ARIMORI, トロント大学  
鬼頭夕佳, Yuka KITO, フランス国立理工科大学  
佐野香織, Kaori SANO, ワルシャワ大学  
芝原里佳, Rika SHIBAHARA, マレーシア科学大学  
米本和弘, Kazuhiro YONEMOTO, マギル大学

## Abstract

In order to be teachers who continue to grow, they need to become self-directed teachers, who can reflect critically on their teaching philosophy and practice, and adapt teaching materials and practices to suit the needs of their own students (岡崎 & 岡崎, 1997; 横溝, 2002). In this paper, authors discuss possibilities of teachers' development using online technology by reporting the activities of the online study group (*tsunagaroo net*) that allow the participants to become self-directed teachers through online dialogues.

## 概要

質の高い日本語教育を継続的に提供するためには、教師が自らの考え・教え方を批判的に振り返り、学習者に合った教材や教室活動を能動的に生み出していく「自己研修型教師」になる必要がある (e.g. 岡崎・岡崎, 1997)。本稿では、対話を通して自己研修型教師を目指す海外で働く日本語教師のオンラインネットワーク『つながろうねっ』の活動の報告やその課題について議論するとともに、教師研修におけるウェブの可能性について模索する。

キーワード： 海外の日本語教育、自己研修型教師、教師の成長、教師研修、教師の連携

## 1. 実践の背景と目的

国際交流基金 (2011) の調査によると、現在 133 の国・地域で日本語教育が行われており、海外に約 365 万人の日本語学習者がいるという。その中で、日本語教育は多様化しており、画一的な日本語教育ではこの現状に十分に対応できなくなっている。特に海外においては、学習者のニーズ・母語・年齢などの個人的要因だけでなく、現地の教育政策、日本との物理的距離、リソースの豊富さ、経済的な豊かさなど社会的要因が異なれば、現地の日本語教育のあり方も異なり、多様性に富む。平畑 (2008) は海外で働く日本語母語話者教師には、指導技術や専門知識に加え、現地における日本語教育の意義・方向性を理解する力が求められると指摘している。しかし、これまでの海外の現職教師向け研修の多くは、間近な問題の対症療法的な解決にばかり目が向けられたり、日本や現地の有力者による一方的な教授になりがちだったのではないだろうか。平畑が述べるように海外の日本語教育現場における母語話者への期待が、依存・指導的役割からパートナーシップへと変化しているのであれば、単に母語話者という属性に甘んじるのではなく、なぜ自分はその土地で日本語を教え、何をを目指すのかを根底から考え直すような教師間の質の高い対話が必要不可欠である。

また、昨今の日本語教育では、欧米における教師教育の議論を手掛かりに、岡崎・岡崎 (1997) を契機として、「教師トレーニング」から「教師の成長」へとパラダイムシフトが

起こり、教師が自らの考え・教え方を批判的に振り返り、学習者に合った教材や教室活動を能動的に生み出していく「自己研修型教師」を目指す必要性が議論されるようになった

(e.g. 横溝, 2002; 縫部, 2010)。しかし、自己研修型教師は、教師自らが適切な研修を選択することや自身の実践を語る場や共有する同僚を必要とする(春原・横溝, 2006)にも関わらず、日本語教育が盛んではない地域で働く教師には、これらの機会を得るのが難しいこともある。また、日本語教育が盛んな地域でも、教師間のネットワークや対話がなければ、現地の現状にあった有効な実践は生み出されない(Van den Branden, 2009)。しかし、昨今は目覚ましいテクノロジーの発達により世界中の人々のコミュニケーションが容易になった。そこで、前述した状況をオンラインテクノロジーを駆使して打開し、対話を通して自己研修型教師を目指すべく、海外で働く日本語教師からなるグループ『つながろうねっと (<https://sites.google.com/site/sekaitsunagaru/>)』を立ち上げた。具体的な活動として、1) Eメールによる日常的な意見交換、2) 香港で開催された勉強会を USTREAM (動画共有サービス) で生配信し、各地域の教師が Google+ (ソーシャルネットワークシステム) の無料ウェブ通話を用い議論に参加、3) 授業を YouTube (動画共有サービス) で配信し互いにコメント、4) 同じテーマでブログを書き互いにコメント、5) Google+を用い Web 座談会を実施し USTREAM で生配信などを行っている。本稿では、無料オンラインツールを利用した活動について報告するとともに、教師研修へのオンラインツール活用の可能性を模索する。

## 2. 活動内容

### 2. 1. Eメールによる日常的な意見交換

『つながろうねっと』には、いわゆる運営委員会のような組織はない。その活動の企画から実施までは核となるメンバーのみで進めるのではなく、その過程を Eメールで多くのメンバーと共有する体制をとっている。例えば、各メンバーは後述のオンライン勉強会や座談会を行うにあたり、テーマの選択、進行、広報など開催までの過程で適宜意見を述べ、運営に参加することができる。この方式は、世界各地の教師を対象にした企画を進める上で、各国の事情を考慮し、反映させることを可能にし、より多くの教師にとって有意義な活動を実現している。また、『つながろうねっと』の活動に対するメンバーのオーナーシップ、オートノミーを高めるという点で、「自己研修型教師」の育成にもつながっていると言えるだろう。

さらに Eメールはメンバー間の日常的な情報交換の手段にもなっている。例えば、授業での取り組みや学習者の成果物の紹介、各地域の教師会等の活動の案内、自分、地域が抱える問題について意見を求め、他地域での事例や活動例の情報を得るなどである。このような情報の共有は、自分の環境にはない視点や新たなアイデアをもたらしてくれると同時に、地理的制約を受けない教師のコミュニティ、ネットワーク形成を実現している。

### 2. 2. 勉強会の USTREAM 配信

2011年9月から2ヶ月に1度、香港での現職教師勉強会を 1) USTREAM で中継し、2) Google+の無料ウェブ通話で世界中の教師と繋ぎ、各地域の実践及び現状の報告や意見交換を行った。更に各自何が出来るか探る対話の時間を別途設けることで一方的な知識の伝達ではない活発な議論を目指した。香港会場には、所属、母語、経験年数が違う多様な教師が毎回25名ほど集まり、他地域からは5~8名程度が Google+を用いて参加し、テーマに沿ってコメントをしたり香港会場からの質問に答えたりした。その他に世界各地で USTREAM を見ている視聴者が勉強会の様子を見てソーシャルストリームにコメントを入れた。

下の表のように、第1回目と第2回目は香港会場にて企画運営する主催者が会場及びオンラインの参加者の意見を考慮しテーマを設定し、第三回目からは香港以外の地域から活動の趣旨に合ったテーマを投げかけてもらうことにした。

表1 勉強会の概要

	日時	テーマ	発題者の所在地
1	2011年10月16日	ひらがな・カタカナの指導法	香港
2	2011年11月27日	敬語の指導法	香港
3	2012年2月19日	教室外の社会と繋がる	アメリカ
4	2012年4月29日	継続学習を支援する	カナダ
5	2012年6月24日	自分の授業・実践を考える・記述する実践研究	日本

勉強会後に行なった質問紙調査によると「足を運んで参加できない方にとって便利」「家に居ながら勉強会を視聴できるのは助かる」と、オンラインで配信された事や映像がネット上に保存されている事が便利さとして評価されていた。「香港という狭い地域だけでなく、グローバルな視点で日本語教育をとらえることができる」「色々な国の話を聞くことは直接自分の教授活動に関わらない場合でも非常に刺激になった」と同一地域内に留まらず、地域間を結んだ点を評価する声もあり、多くの参加者が他地域との繋がりを肯定的に捉えていた。その上で「他地域もだいたい似ているだろうと勝手に思っていたが新しい発見があった」

「なぜ自分はその方法をとるのかについて考えざるを得ませんでした」と、他地域の参加者との意見交換や自身の実践を他地域の人にもわかるように伝えることにより、無意識に抱いていた自分の教育観を振り返り、自身の実践を批判的に見る必要性を感じた参加者もいた。

例えば、第3回勉強会の香港会場では、Google+によるアメリカの発題者の話、Twitterによる他地域からのコメント、YouTubeによる学習者の作品、そして香港会場の質問者の意見という複数の地域から発信される複数の情報をときに同時にときに別々に享受できる環境になっていた。複数の情報が入ってくるため、香港会場の参加者は一つの情報を無批判に受け入れるのではなく、多角的複合的に情報を捉え考察することが可能であった。また、USTREAMで配信されたため、参加者は会場の自分たち自身の姿も映像で確認することができ、従来の講演者対聴衆という構図が崩れ、参加者全てが情報の受信者であると共に発信者であるという感覚、また会場全体として一つの発信者であるという一体感が生まれていた。

### 2. 3. Web 上座談会

インターネットは世界をつなぎ、勉強会の各地への配信も可能となったが、時差の関係でライブ参加の難しい地域もある。これらの地域では録画視聴という形での参加になるが、これが単なる視聴で終わらず真の学びへと導かれるような対話の機会を設けるため、第3回勉強会からGoogle+を利用した「Web 上座談会」を勉強会後に行い、勉強会同様USTREAMを使って配信した。座談会では、各回のテーマについて実践や経験の共有、疑問・問題点の指摘とその対応案について対話もたれた。座談会には勉強会の話題提供者、ライブ参加者、視聴のみの参加者が集まったが、いずれの場合も勉強会後に一定の時間をおくことでより深い内省が可能となり、そのことが新たな視野開拓につながっていた。

また、個人が予め自身の地域ネットワークに「小勉強会」を呼びかけ、その地域の意見をまとめて参加する試みもあった。例えばポーランドでは「小勉強会」募集に応じた者が勉強会視聴の感想・意見・実践案などを共有し、それをふまえて参加希望者が座談会に臨んだ。この試みには「互いに離れたところにいる教師が教育理念を振り返りながら語り合い、共有できることの大切さを感じた」「この勉強会のために国内の先生が集まって情報交換できたのも良かった」等の意見が寄せられた。同じ地域であっても様々な事情で教師同士のコミュニケーションが難しいことが多いが、ここでは世界をつなぐ試みが地域の教師をつなぐ場を作り出すきっかけともなった。同様に、フランスでも「小勉強会」が行われたが、Google+のハングアウト機能を利用したためか、勉強会の内容やネットワーク作りという点のみならず、

教室への活用を念頭においたテクノロジーへの関心からの参加が多かった。

このように勉強会が Web 上座談会、さらに各地の「小勉強会」へとつながったことは、議論・内省の持続と深まりをもたらした。一方、座談会の公開・非公開の問題も持ち上がった。座談会をネット公開することで参加をためらう者がいたり、発言に慎重にならざるを得ない話題があったりしたが、このことはせっきくの議論の可能性を狭めることにもなりかねない。公開に対する個人の意識差とともに、テーマや目的に応じて公開の意義を再検討する必要があるだろう。

## 2. 4. みんなでブログを書こう

世界の日本語教師がブログを使って繋がる企画である。参加者は各自のブログに同時期に同じテーマでエントリーを書き、トラックバックを利用して活動代表者のブログのエントリーと自分のエントリーをリンクさせ、最終的には活動代表者のブログにトラックバックされた全てのエントリーを読むことができる活動である。第1回目のテーマは「私が日本語教師になったわけ」で2012年1月末～2月初旬に行われ、活動代表者のブログや参加者のTwitterによる告知で世界各地から28名が参加した。終了後のアンケートでは、他の教師のストーリーへの共感や、日本語教師になった自己の動機やこれまでの道のりを振り返り有意義だったとする意見を得た。第2回目は「今がんばっていること・取り組んでいること」をテーマとし、12名が自身の研究や教育実践、学習者との関わりや仕事において日頃心がけていることなどを共有した(4月末～5月初旬実施)。定期的にこの企画を続けていきたいが、活動代表者と参加者数名が使用しているブログサーバーがトラックバックのサービスを停止したため、今後どのようなオンラインツールを利用して企画を続行するかが課題である。

## 3. おわりに一つながる、考える、生み出す、発展させる

このように無料オンラインツールを使い、内省する場を世界中に広げることで、同じ志を持った教師の対話が広まり、自己研修型教師になるための第一歩である自身の考えや教え方を批判的に振り返る場を創出できた。しかし、本活動には、オンラインであるがゆえの問題点や通信資源やオンラインに対する考え方やリテラシーの差、インターネットの規制など解決しなければならない問題点も多々ある。パネルでは、本活動の報告とこれらの課題に加え、発表者・聴衆との間で以下の点について議論できればと考えている。

- 1) 個々の参加者が自身の関心や問題について深い議論ができるように、つながる相手や方法に関して他にどのような可能性があるのか
- 2) 行われた議論をもとに新たな実践を生み、人と共有し発展させていくために必要な活動の仕組みとは何か
- 3) 活動に関する自由で建設的な議論と活動の発展的な継続はどのような組織運営のあり方によって可能になるのか

## 参考文献

- 岡崎敏雄・岡崎眸(1997)『日本語教育の実習—理論と実践』アルク
- 国際交流基金(2011)『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2009年 概要』  
<<http://www.jpff.go.jp/japanese/survey/result/index.html>> (2012年6月9日)
- 春原憲一郎・横溝紳一郎編著(2006)『日本語教師の成長と自己研修—新たな教師研修とストラテジーの可能性をめざして』凡人社
- 平畑奈美(2008)「アジアにおける母語話者日本語教師の新たな役割—母語話者性と日本人性の視点から」『世界の日本語教育』18号, 1-19.
- 縫部義憲(2010)「日本語教師が基本的に備えるべき力量・専門性とは何か」『日本語教育』144号, 4-14.
- Van den Branden, K. (2009). Diffusion and implementation of innovation. In M.H. Long & C.J. Doughty (Eds.), *The handbook of language teaching*, pp. 659-672. West Sussex, UK: Blackwell.